ウェストン碑（上高地）

山 I

昭和35年7月15日発行

¥ 430

編　者　串田孫一
発行者　古田晁
印刷者　中内佐光
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
電話　東京(291)7651番(代表)
振替　東京165768番

© 1960　Printed in Japan

暁印刷・鈴木製本

はじめに

山登りの先輩たちによって書き残された文章は非常に多い。日本の近代登山がはじまってから今日までの年月は、それほど長いとは思わないが、そして山に登るという極めて単純な行為に、目立った変遷がありよう筈もないとも思えるが、一つの道具、例えばルックザックをとって見ても、その型にはいろいろの変遷があり、道具としては、便利で丈夫であることを目ざして移り変っていながら、それを使う人の気持にはそれよりも複雑なものが次々に生れている。

日本の登山の歴史は、もうはっきりと考えられる。単に、何年に誰が何処の山へ登ったというだけでなく、山に登る人の気持の歴史というものが考えられるようになった。

日本登山年表は、これまでかなり詳しいものが何種類か出ている。例えば、山と溪谷社の『登山講座』別巻「山岳事典」中の小島六郎氏によるものなどは新しい。これに限ったことではないが手許に年表を所持することは、そして気付いたことをそれに書込んでおくことは、便利である。

西岡一雄氏の『登山の小史と用具の変遷』（朋文堂）は、やはり年表に近いものと、特に登山用具（ルックザック、登山靴、シュタイグアイゼン、ピッケルその他）の変遷について詳しく述べてある。この本にも「登山風俗のこと」という一章が絵入りで加えられてあるが、菅沼達太郎氏の『山岳服装近代色』（大村書店・昭和七年）は今になれば大分古い本であるが、山の服装史として興味深いものである。

こういう風に、日本の登山の一側面史はさまざまの方によって書かれている。側面史ではなくとも、長尾宏也氏の『登山』（ダヴィッド社）の中の「日本登山小史」などは、「物語のなかの山」から「山岳界の今日の課題」にまで、広く見渡した歴史と言えるだろう。

ところで私は、常々、山に登る人たちの心の歴史を考えている。服装や用具の変遷にともなって、山に登る人の心にもいろいろの変化があった筈である。時には心の変化にともなって、所持するものも変り、また登り方も違って来たと思われる。最近のように、ただ営利を目的とする観光の施設がどんどんと増え、山頂までバスがのぼり、ロープウェイを利用して渓谷を眺めながら、汗一つかかずに高い峠まで達することも出来るような時代に、山登りをする人の心が昔と少しも違っていない筈はない。

山そのものも、自然の変化があるし、また人工的に崩されたり、湖が出来たりして、確かに変っている。しかし山の表情は登る人の心の変化によって大きく変って来たように思われる。それをさぐるための資料として、私は、山の古い本を読みかえして来た。

山に関する古い文章は、いずれも捨てがたいものを持っている。例えば雑誌『山岳』の古いところを見ていると、そこに入れられた広告文にも心の山の資料としてかなり貴重なものも見あたる。私自身がそういう意味の山の歴史を書くならば、広告文も勿論加えることに少しも躊躇はしないだろう。しかし、ここでは、その一つ一つがそれぞれの値打を持っている文章をとって、山に向い、山に入っている心を語って頂くことにした。

紀行文が大部分を占めるが、それ以外のものも入っている。解説も、それぞれの文章の理解に役立つと思われる事柄にとどめ、あまり私的な感想はさけるようにした。

この解説を書き、またどの文章を選ぶかについて、小林義正氏の『山と書物』及び『続・山と書物』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は実にありがたい贈物であった。私はこの二冊の本によって実に多くのことを教えられた。

私から読者の方々に特別にお願いすることはないが、昔の方々の山に対する心をここに静かに読みとって頂いて、私どもの山に向う心を一層豊かにしたいということ、これだけである。

昨年、同じ筑摩書房から私が編集させて頂いた『忘れえぬ山』三巻と併せ読んで下されば、山への思慕も一層深まるだろう。

*

ところで私は、志賀重昂の『日本風景論』中の文章を最初に載せて、大体その本の発行年順に並べることにした。このために、そこに書かれた実際の登山が前後する場合も生ずるかも知れない。

また遡って日本人の山に対する関心をさぐろうとすれば、その方法はある。前述の長尾宏也氏は、石器時代から話をはじめておられる。また風土記によれば、山と神とを結びつけていた時代のことが分る。これは日本に限ったことではなく、山には必ず神話伝説の時代があった（サミヴェル「神話と伝説の山」『山岳』第三巻　朋文堂）。続いて考えられるのは山岳信仰で、山伏や行者を中心として講中が起り、これは現在でも、夏の山開きとともに、方々の山でその姿を見ることが出来る。

私は以前に、放送のために録音された武田久吉氏のお話を伺ったことがある。それによると、日本の高山に登ることは坊さんたちによってはじめられてはいたが、徳川時代の末期になると、本草家が各地で植物をさがしてその序に山に登った記録が残っている。学術的な登山が行われていたことを忘れてはならない。明治以後には陸地測量部の人も入っているが、それは別にしても、鉱物や植物を学問の上で求めて山に登った。

しかし、私がここで扱いたかったのは、登山そのものを目的として山に入る人たちの心の歴史であるから、古い時代のことには触れなかったわけである。従って明治以後の書物から選び出すことにな

った。そして全三巻中、この第一巻には、日本の山々、主として北アルプスでの、登山の黎明期に属するものを入れることにした。

若い方々にとっては中にはかなり読みにくい文章もあろうけれども、私としては出来るだけ原文を崩したくなかった。ゆっくりと、古い時代をしのびながら読んで頂きたい。

*

第一巻に入れる写真のことではいろいろと考えてみたが、古い本に挿入されているものの複製は殆んど不可能であることが分ったので、大部分を三宅修氏に依頼した。この本のために、戸隠や上高地まで出かけて頂いた。また資料としての写真撮映のために、貴重な書物を貸して下さった小林義正氏その他の方々にもお礼を申さなければならない。

一九六〇年六月

串田孫一

目

次

はじめに　串田孫一
登山の気風を興作すべし　志賀重昂　11
槍ガ岳　W・ウェストン　26
登山術　高山式（訳）　57
高山の特色　山崎直方　61

谷より峰へ峰より谷へ　小島烏水　83
千山万岳　志村烏嶺　135
鳥海山ほか　河東碧梧桐　179
日本アルプス縦断記　一戸直蔵　河東碧梧桐　214
長谷川如是閑

装幀　串田孫一

写真　三宅修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山

I

登山の気風を興作すべし

志賀重昂

山、山、その平面世界より超絶するところ多々。

（一）　山は太地の彩色を絢煥す

紅、白、玄、黄、青、緑は、平面世界に在りといえども尋常これを認め得、花の紅、月の白、雲の玄、沙の黄、水の青、木の緑、いずれの処よりか認め難からん、しかも太地間の純粋無垢なる紫色、藍靛色は、山を仰望するにあらずんばついに観るべからず。想う山の紫色、藍靛色は、細緻鮮麗、加うるに光沢燦然、特に一雨洗うがごとく新霽水に似たり、この際に縹緲せる凝黛堆藍は、染具をもってかくのごとく調合せんとするも、庸凡の頭脳をもって到底為し得べからず、太地の彩色は山を得て始めて絢煥す。

（二）　雲の美、奇、大は山を得て映発す

唐人、巌を「雲根」と呼ぶ、趣あるかなこの称や、雲、山より起り、山、雲を得ていよいよ美、ますます奇、一層々に大を添う。もしそれ雲、縷々として藕糸のごとく、山の背腹を曳くや、宛として

神女の羅裳を織るに似、朝暾夕陽たまたまこれと映発して純紅火のごとく、羅裳桃花色に染めおわる。倏忽にして雲、来往迅速、澎湃として天を捲き、百道狂馳、山、その間より或は湧き、或は没し、或は浮び、或は沈み、汎々として大海上の島嶼と化成す。頃刻にして空気の運動静穏となるや、雲はようやく下降して山腹に繚繞し、その上より絶頂の峭然孤尊するを観る。要するに山、雲を得、雲、山を待ち、相互にいよいよ美、ますます奇、一層々に大を映発す。

（三）　水の美、奇は山を得て大造す

水、山に在りていよいよ美、ますます奇を成し、平面世界に在りて看得ざる水の現象は、山に在りてのみよく認め得。水の最晶明なるもの、最平和なるもの、最藍靛なるものは山中の湖これを代表し、水の最激烈なるものは山蔭の瀑布これを代表し、水の最清洌なるもの、最可憐なるものは山間の渓水これを代表す。およそ水の睡り怒り咲うの状貌は、山に入らずんばついに観るべからず。しかのみならず巌は水を承けて緑潤となり、水に齧まれて奇態怪状を呈出す。水の美、水の奇は山を得てここに大造し、巌の美、巌の奇は水を待ちて始めて完成す。

（四）　山中の花木は豪健磊落なり

平面世界に在る花木は、自ら平面世界の感化を受け、かつ人間に成長するをもって、ために豪健磊落ならず、畢竟艶を競い媚を呈するもの往々然り。山中にある花木に到りては然らず、自然のままに成長し、人間外に不羈独立するが上に、時に風餐雨虐、或は土壌を剥がれ、或は巌石に圧抑せられ、しかも悍然勇往、一層々に不羈独立の素養を助長し来る、要するに山中の花木は豪健なり、磊落なり、気骨あり、いわんや花は山に開きていよいよ鮮かに、木は山に長じてますます蒼翠秀潤を添う。花木の妙所を太悟せんと欲せば、山に入らずんばついに得ず。

一　登山の気風を興作すべし

楼に登りて下瞰す、なおかつ街上来往の人を藐視するの概あり、東京愛宕山に登りて四望す、なおかつ広遠の気象胸中より勃発するを覚ゆ、何ぞいわんや嵯峨天に挿むの高山に登るをや。山に彩色の絢煥あり、雲の美、雲の奇、雲の大あり。水の美、水の奇あり、花木の豪健磊落なるあり。万象の変幻や、かくのごとく山を得て大造し、山を待ちて映発するのみならず、その最絶頂に登りて下瞰せば、雲煙脚底に起り、その下より平面世界の形勢は君に向かいて長揖し来り、ことごとくこれを掌上に弄し得、君ここに到りて人間の物にあらず、宛然天上に在るがごとく、もしくは地球以外の惑星よりこの惑星を眺観するに似真個に胸宇を宏恢し、意気を高邁ならしめん、加うるに山の組織の壮絶なるを頓悟し、山の形体の完美なるを太覚し、そぞろに太気の清新洗うがごとき処に長嘯し、兼て四面の閲然寂静なるうちに潜思黙想せば、君が頭脳は神となり聖となり、自ら霊慧の煥発するを知る。いわんや山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますます登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよますます快楽の度を加倍す。これを要するに、山は自然界の最も興味あるもの、最も豪健なるもの、最も高潔なるもの、最も神聖なるもの、登山の気風興作せざるべからず、大に興作せざるべからず。

学校教員たる者、学生生徒の間に登山の気風を大に興作することに力めざるべからず、その学生生徒に作文の品題を課する多く登山の記事をもってせんことを要す。

二　登山の準備

一山に登り一峯に攀らんとする、未だ必ずしもはなはだ準備を要せず、しかも肥後、日向の境上、伯耆、因幡、美作の境上、大和、紀伊の境上、信濃、飛騨、越中、越後の境上、旧奥州、旧出羽の境上、北海道の内部なる連山層峯の寰区に入り、淹留数日、もって太奇を探らんとせば、自から準備の要すべきものあり。

（一）衣

軽装なる洋服をもっとも利便とす。日本服なりせば、紬（結城紬の類）もっとも可、また股引、脚絆の準備特に切要なり。その他一般に切要なるものは、

草鞋　曲亭馬琴警語あり、「草鞋は旅人の甲冑也」と、然ればこの奥には草鞋を鬻ぐ家またなしと云う村落にてよく敲きたるもの幾足となく購求すべし。夏日は足袋の底なきものを可とす。

長靴　草鞋を用いず長靴にて登山せんとせば、良製なるものを穿つべし、靴の皮を種油または獣脂にて塗るか、もしくは生玉子を割りて靴の中に投じ而して後穿てば足痛すること少し。

靴足袋　靴足袋は良製の毛厚なるもの幾個となく携帯すべし、夏日なればかえってその厚きもの即ち羊毛製のものを最可とす。靴足袋の内部を石鹸にてよく塗り而して後穿てば足痛少し。足痛せば靴を脱し右足の足袋を左足に左足の足袋を右足に穿ち換えば痛み癒ゆること妙。また一足だけ痛みなばその足より靴を脱し足袋を裏換えしして後更に穿てば痛み癒ゆべし。靴足袋不足の際は手拭または手巾を石鹸にてよく塗りこれにて皺なきように両足を裹むべし。

草鞋と長靴と孰れ　草鞋と長靴とは登山にいずれか利便なりやの疑問ありといえども、個々人々の好尚ありて、甲は草鞋を適せりとし、乙は長靴を可とす、かくのごとくなるをもって俄にこれを決すべからず。

フランネル　フランネルは山中に宿泊する間身体に纏うを最可とす、統計上の結果に拠れば、フランネルのシャツ及び下ズボンを穿ちたる者は、遠征もしくは探検の際、疾病死亡を脱れたる者殊に多しと。リンネルのシャツは登山に最も可ならざるものなり、このシャツの汗にて湿いたる際、たまたま空気の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com